

意思決定尺度：個人における意思決定傾向を測定するために、井出野他（2012）の尺度を用いた。この尺度は、人が意思決定を行う際の選択に対して、意思決定論における効用理論の比較可能性や推移性という選択肢の関係性や、意思決定方略（例えば加算型や辞書編纂型等）等、意思決定論において前提となっている諸概念を反映するよう作成された。例えば、リスク回避（例：安全な決定を行いたい）やリスク選好（例：結果が予想できるようなことはしたくない）などであった。尺度は26項目で構成され、7件法（7：非常にあてはまる～1：全くあてはまらない）で回答を求めた。

形式性追求傾向尺度

個人における意思決定傾向を測定するために、高橋他（2010）の尺度を用いた。この尺度は、社会学において主張されてきた形式性を追求する傾向を測定する尺度として測定することを目的として作成されたものである。ここでの形式性とは、組織等の規則によってあらかじめ定められた様式に基づくことを指す（Merton, 1968）。項目は、「マニュアルがないととても不安になる」や「仕事をするとき、何かを提案することよりも、ミスをしないことこそが重要だ」などである。評定方法は5件法（5：非常にあてはまる～1：全くあてはまらない）で、25項目で構成された。

分析方法

様々な社会的問題を扱った意思決定問題に対する人々の意思決定を個人差要因から検討するために、以下の手順で分析を行った。

- (1) 意思決定尺度の因子分析
- (2) 形式性追求傾向尺度の因子分析
- (3) 意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の因子間相関
- (4) 意思決定問題と尺度との関連性

「本末転倒」現象を個人差要因から検討するために、意思決定尺度と意思決定問題との関連性の検討を回帰分析を用いて行った。独立変数には、意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の各因子得点を用いた。意思決定問題の回答結果を従属変数に用いるために集計を行った。問一、問三、問四における集計方法は、各問の選択肢のうち、リスクを含む可能性のある選択肢を選択した場合を0、生命への危険はないとする選択肢を選択した場合を1として集計した。問二に関しては、7件法の評定値をそのまま従属変数として使用した。各問における集計の詳細は下記の通りに設定した（表1）。

表1：意思決定問題における各問の集計方法詳細

	リスクを含む可能性のある選択肢	生命への危険はないとする選択肢
問一	摂取した場合直ちに健康に影響が出る可能性のある成分が含まれる食品	摂取しても直ちに影響は認められないものが含まれる食品
問三	液状化の可能性がある、土地が液状化になると資産価値が低下する可能性のある埋立地	地盤の固い土地で資産価値が低下する可能性の低い土地
問四	ストレスの原因となる状況を改善を望まない選択肢	ストレスの原因となる状況の改善を望む選択肢

用いた分析方法は下記の通りであった。

問一、問三、問四：ロジスティック回帰分析

問二：重回帰分析

C. 結果

(1) 意思決定尺度の因子分析

意思決定尺度の因子構造を検討するために26項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、井出野他（2012）と同様の因子構造が見られ、5因子（熟慮型、不確実性選好、不確実性回避、一貫性、満足化）が抽出された（表2）。

第1因子の“熟慮型”因子は、「選択肢の特徴をできるだけ多く考慮して決めたい」や「一つの価値観だけではなく、でき

るだけ多くの価値観から考えようとする」などの7項目から、第2因子の“不確実性選好”因子は、「結果が予想できるようなことはしたくない」などの4項目から、第3因子の“不確実性回避”因子は、「確率が分からないような決定はしたくない」などの2項目から、第4因子の“一貫性”因子は、「どんな選択肢でも好きな順に並べられる」などの2項目から、第5因子の“満足化”因子は、「ほどほどに満足できる選択肢があるか考える」などの2項目から構成された。

各因子の α 係数は熟慮型因子が.821、不確実性選好因子が.666、不確実性回避因子が.647、一貫性因子が.595、満足化因子が.581であった。尺度全体の α 係数は.702であった。

また、熟慮型因子と不確実性回避因子間と、熟慮型因子と一貫性因子間に弱い因子間相関が認められた。

表2 意思決定尺度の因子分析結果

因子1: 熟慮型 ($\alpha=.821$)					
比べられないような選択肢の組合せがあると思う	.693	.117	-.177	-.267	.115
選ぶ場面が変わると、重視する要素が変わる	.658	-.017	-.035	-.168	.135
選択肢の特徴をできるだけ多く考慮して決めたい	.650	-.031	-.028	.121	.000
ベストな選択肢がないか、常に考える	.642	-.026	.097	.095	-.079
最も良い選択肢は何かを探そうとする	.635	-.104	.090	.095	-.058
一つの価値観だけでなく、できるだけ多くの価値観から考えようとする	.607	.089	-.115	.121	-.011
すべての選択肢を吟味する	.452	.026	.132	.301	-.075
因子2: 不確実性選好 ($\alpha=.665$)					
結果が予想できるようなことはしたくない	.050	.796	.124	-.090	-.073
どんな結果になるか、その確率が分かっていることはしたくない	.051	.709	.217	-.085	-.073
何が起るか分からないような選択肢を選びたい	-.020	.401	-.380	.243	.082
どんな結果になるか、その確率が曖昧な選択肢を選びたい	-.081	.397	-.172	.132	.165
因子3: 不確実性回避 ($\alpha=.647$)					
確率が分からないような決定はしたくない	-.066	.152	.722	.039	.053
確率も結果もわからないような決定はしたくない	-.062	.053	.676	.031	.148
因子4: 一貫性 ($\alpha=.595$)					
どんな選択肢の組合せでも比較できると思う	-.061	-.022	.073	.729	.012
どんな選択肢でも好きな順に並べられる	.045	-.033	-.054	.537	.046
因子5: 満足化 ($\alpha=.581$)					
ほどほどに満足できる選択肢があるか考える	.108	-.101	.160	.048	.646
ほどほどのレベルだったらその選択肢を選んでしまう	-.004	.023	.083	.015	.588
累積寄与率(%)	20.949	29.818	36.18	40.915	44.389
因子間相関	I	II	III	IV	V
I	-	-.24	.45	.46	.11
II		-	-.25	.07	.15
III			-	.10	-.03
IV				-	-.02
V					-

※主因子法、Promax回転、尺度全体の α 係数は.702

(2)形式性追求傾向尺度の因子分析

形式性追求傾向尺度の因子構造を検討するために、因子分析(主成分解、プロマックス回転)を行った。その結果、高橋他(2010)と同様の因子構造が確認され、4因子(マニュアル志向、型への安心、決定重視、責任回避)が抽出された(表3)。

第1因子の“マニュアル志向”因子は、「悩んだときは、とにかくマニュアルに忠実に従っておけば間違いがないと思う」や「仕事は、マニュアルや手引書どおりに進めることが重要だ」などの6項目から、第2因子の“型への安心”因子は、「工業規格(JIS)や国際規格を取得していない商品は、価値の低いものだと思う」などの3項目から、第3因子の“決定重視”因子は、「一度決めた打ち合わせの内容があとで変わると腹が立つ」などの4項目から、第4因子の“責任回避”因子は、「不都合があると感じた場合でも、きまりに反していなければそのままにしておく」などの2項目から構成された。

各因子の α 係数は、マニュアル志向因子が.757、型への安心因子が.464、決定重視因子が.593、責任回避因子が.427であった。尺度全体の α 係数は.780であった。

また、マニュアル志向因子と型への安心因子間と、マニュアル志向因子と決定重視因子間に弱い因子間相関が認められた。

表 3: 形式性追求傾向尺度の因子分析結果

因子	項目	因子1	因子2	因子3	因子4	
因子1: マニュアル志向 ($\alpha=.757$)	ものごとを決めるとき、先生や上司の指示があると安心する	.810	-.099	-.060	-.130	
	悩んだときは、とにかくマニュアルに忠実に従っておけば間違いがないと思う	.665	.070	-.047	.204	
	グループ内の話し合いでトラブルが生じたときは、グループで決まっている規則にしたがって解決することを重視する	.630	-.201	.190	.019	
	疑問を解決するときは、自分で考えるよりも、まず、専門書やマニュアルを参照する	.549	.063	.001	.061	
	仕事は、マニュアルや手引書どおりに進めることが重要だ	.531	.273	.022	.019	
	マニュアルがないととても不安になる	.530	.354	-.020	.048	
因子2: 型への安心 ($\alpha=.464$)	工業規格 (JIS) や国際規格を取得していない商品は、価値の低いものだと思う	-.004	.673	-.003	.129	
	賞味期限や消費期限の表示がない食品は買わないようにしている	.130	.642	-.017	-.289	
	業績目標やノルマが決まっていると、何となく落ち着かない	-.073	.585	.017	.213	
因子3: 決定重視 ($\alpha=.593$)	一度決めた打ち合わせの内容があとで変わると嫌が立つ	.015	-.236	.714	.275	
	書類などの文章表現にミスがあると、耐えられない	-.200	.292	.709	-.086	
	手紙や書類をつくる時、体裁や様式に抜けがないかどうかを常に気にする	.102	-.036	.626	-.327	
	決まった手順どおりに仕事をしない人を見るとイライラする	.268	.041	.539	.045	
因子4: 責任回避 ($\alpha=.427$)	不都合があると感じた場合でも、まきりに反していなければそのまましておく	.185	-.111	-.118	.707	
	仕事では、自分がすべきことを行うことが重要で、それ以外のことは知らなくてもよい	-.116	.311	.073	.685	
		累積寄与率 (%)	25.753	35.39	43.764	50.904
		因子間相関	I	II	III	IV
		I	-	.326	.320	.250
		II		-	.266	.142
		III			-	.112
		IV				-

※主成分解、Promax回転、尺度全体の α 係数は.780

(3) 意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の因子間相関

意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の各因子間の関係を検討するために、相関分析を行った(表4)。その結果、不確実性回避因子(意思決定尺度)とマニュアル志向(形式性追求傾向尺度)間と、不確実性回避因子(意思決定尺度)と決定重視因子(形式性追求傾向尺度)間に弱い正の相関が認められた。

表 4: 意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の因子間相関

	熱感型	不確実性選好	不確実性回避	一貫性	満足化	マニュアル志向	型への安心	決定重視	責任回避
熱感型	1.00								
不確実性選好	-.15**	1.00							
不確実性回避	.27**	-.08*	1.00						
一貫性	.36**	.06	.08**	1.00					
満足化	.22**	.02	.19**	.07*	1.00**				
マニュアル志向	-.02	.04	.31**	-.09*	.25	1.00			
型への安心	-.07*	.21**	.20**	.09**	-.00*	.39**	1.00**		
決定重視	.19**	.03	.30**	.04	.10**	.33	.28**	1.00	
責任回避	-.11*	.18**	.07*	-.09*	.13**	.21**	.11**	.07**	1.00**

※Pearsonの相関係数

(4) 意思決定問題と尺度との関連性
意思決定尺度因子と形式性追求傾向尺

度因子が意思決定問題の選択結果に与える影響について検討するために、回帰分析を行った。本概要書では、有意な結果が示唆された問題のみ分析結果を示す。

食品選択問題2の回答結果に対する形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が食品2において安全性の高い選択肢を選択する要因であることが示唆された($\beta=.331, p<.05$)。

食品選択問題2「ハマグリ」の回答結果に対する意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が食品2において安全性の高い選択肢を選択する要因であることが示唆された($\beta=.297, p<.05$)。

食品選択問題3の「パン」の回答結果に対する形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向($\beta=.491, p<.01$)が食品3において安全性の高い選択肢を選択する要因であることが示唆された。

食品選択問題3の回答結果に対する意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が食品3において安全性の高い選択肢を選択する要因であることが示唆された($\beta=.568, p<.01$)。

食品選択問題4「魚」の回答結果に対する形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が食品4において安全性の高い選択肢を選択する要因であることが示唆された($\beta=.279, p<.05$)。

食品選択問題5「塩」の回答結果に対する意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、不確実性選好が食品5においてリスクを含む可能性のある選択肢を選択する要因であることが示唆された($\beta=-.167, p<.05$)。

食品選択問題6「ハム」の回答結果に対する形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が

食品6において安全性の高い選択肢を選択する要因であることが示唆された($\beta = .392, p < .05$)。

食品選択問題6の回答結果に対する意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が食品6において安全性の高い選択肢を選択する要因であることが示唆された($\beta = .397, p < .05$)。

食品選択問題7「だし」の回答結果に対する意思決定尺度因子の影響の検討を行った。その結果、不確実性回避が食品7においてリスクを含む可能性のある選択肢を選択する要因であることが示唆された($\beta = -.141, p < .05$)。

食品選択問題7の回答結果に対する形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が食品7においてリスクを含む可能性のある選択肢を選択する要因であることが示唆された($\beta = -.359, p < .05$)。

食品選択問題7の回答結果に対する意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が食品7においてリスクを含む可能性のある選択肢を選択する要因であることが示唆された($\beta = -.358, p < .05$)。

復興財源問題の回答結果に対する意思決定尺度因子の影響の検討を行った。その結果、不確実性選好が国債を選択する要因であることが示唆された($\beta = .157, p < .05$)。

復興財源問題の回答結果に対する形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が国債を選択する要因であることが示唆された($\beta = .239, p < .05$)。

復興財源問題の回答結果に対する意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、不確実性選好($\beta = .167, p < .05$)とマニュアル志向($\beta = .236, p < .05$)が国債を選択する要因であることが示唆された。

住宅選択問題の回答結果に対する意思決定尺度因子の影響の検討を行った。その結果、満足化が安全性の高い選択肢を選択する要因であることが示唆された($\beta = .186, p < .05$)。

住宅選択問題の回答結果に対する意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、満足化が安全性の高い選択肢を選択する要因であることが示唆された($\beta = .25, p < .01$)。

薬問題1の回答結果に対する形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が薬を飲むことを選択する要因であることが示唆された($\beta = .345, p < .01$)。

薬問題1の回答結果に対する意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が薬を飲むことを選択する要因であることが示唆された($\beta = .332, p < .05$)。

薬問題2の回答結果に対する意思決定尺度因子の影響の検討を行った。その結果、不確実性回避が薬を飲むことを選択する要因であることが示唆された($\beta = .193, p < .01$)。

薬問題2の回答結果に対する形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が薬を飲むことを選択する要因であることが示唆された($\beta = .502, p < .01$)。

薬問題2の回答結果に対する意思決定尺度と形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が薬を飲むことを選択する要因であることが示唆された($\beta = .442, p < .01$)。

薬問題3の回答結果に対する意思決定尺度因子の影響の検討を行った。その結果、不確実性回避が薬を飲むことを選択する要因であることが示唆された($\beta = .193, p < .01$)。

薬問題3の回答結果に対する形式性追求傾向尺度の影響の検討を行った。その結果、マニュアル志向が薬を飲むこと

を選択する要因であることが示唆された ($\beta = .343, p < .05$)。

D. 考察

本研究では、様々な食品問題を扱った人々の意思決定を個人差要因から検討するために回帰分析を行った。

意思決定尺度からの検討においては、有意な回帰があまり認められなかった。

形式性追求傾向尺度からの検討においては、マニュアル志向因子が安全性の高い選択肢を選択する要因として有意な結果を示している項目が多く認められた。これは、マニュアル志向の人にとって本研究で取り上げたリスクが危険視されマニュアル化されているためであると考えられる。

また、本研究では、「本末転倒」現象を個人差要因から検討するために、意思決定問題を題材として取り上げた。本研究において、「本末転倒」現象とは、安全性を考慮しリスクを避けたいという視点で選択した手段を用いることで、むしろリスクの含まれる選択肢を選択し、安全性が損なわれるということであると捉えられる。その観点から意思決定問題の分析結果を捉えると、リスクを含む選択肢を選択する要因となる因子が示唆された結果が、「本末転倒」現象を生起させる要因であると考えられることができる。一方で、安全性の高い選択肢を選択する要因となる因子が示唆された結果は、「本末転倒」現象を抑制する要因であると考えられる。

下記に各項目の分析結果の考察を行う。

食品選択問題 2「ハマグリ」について、形式性追求傾向尺度のみの分析と意思決定尺度・形式性追求傾向尺度併せての分析では、マニュアル志向が安全性の高い選択肢を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示してい

たと考えられる。

食品選択問題 3「パン」について、形式性追求傾向尺度のみの分析では、マニュアル志向が安全性の高い選択肢を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示していたと考えられる。一方、型への安心はリスクの含まれる可能性のある選択肢を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の生起要因として有意な結果を示していたと考えられる。

食品選択問題 4「魚」について、形式性追求傾向尺度のみの分析では、マニュアル志向が安全性の高い選択肢を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示していたと考えられる。

食品選択問題 5「塩」について、意思決定尺度・形式性追求傾向尺度併せての分析では、不確実性選好がリスクの含まれる可能性のある選択肢を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の生起要因として有意な結果を示していたと考えられる。

食品選択問題 6「ハム」について、形式性追求傾向尺度のみの分析と意思決定尺度・形式性追求傾向尺度併せての分析では、マニュアル志向が安全性の高い選択肢を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示していたと考えられる。

食品選択問題 7「だし」について、意思決定尺度のみの分析では、不確実性回避がリスクの含まれる可能性のある選択肢を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の生起要因として有意な結果を示していたと考えられる。また、形式性追求傾向尺度のみの分析と意思決定尺度・形式性追求傾向尺度併せての分析では、マニュアル志向が安全性の高い選択肢を選択する要因

として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示していたと考えられる。

復興財源問題について、意思決定尺度のみの分析では、不確実性選好が国債を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示していたと考えられる。これは、国債が増税よりも馴染みのない商品であることが選択に影響したと考えられる。また、形式性追求傾向尺度のみの分析では、マニュアル志向が国債を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示していたと考えられる。これは、財源の確保手段という難問に対し、マニュアル志向の人は自分で考えるよりも、専門書等を参考にするという特徴があるため、自分の持っている知識や感情で判断するのではなく、問題の教示を参考にしたため国債を選択したと考えられる。意思決定尺度・形式性追求傾向尺度併せての分析では、不確実性選好とマニュアル志向が国債を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示していたと考えられる。

住宅選択問題について、意思決定尺度のみの分析と意思決定尺度・形式性追求傾向尺度併せての分析では、満足化が安全性の高い土地を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示していたと考えられる。これは、満足化の人が一つの属性でも条件を満たす選択肢があれば採択するという特徴があるため、液状化の心配のない土地という属性の含まれる選択肢を選択したのだと考えられる。

薬問題1について、形式性追求傾向尺度のみの分析と意思決定尺度・形式性追求傾向尺度併せての分析では、マニユ

アル志向が薬を飲む選択肢を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示していたと考えられる。これは、マニュアルがないと不安になるという特徴を持つマニュアル志向の人が、やる気が出せなくて悩んでいるときに薬が改善する手引きとする可能性があると考えられる。

薬問題2について、意思決定尺度のみの分析では、不確実性回避が薬を飲む選択肢を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示していたと考えられる。これは、嫌悪感により精神的に不安定になることを避けたいと考えた結果によるものだと考えられる。また、形式性追求傾向尺度のみの分析と意思決定尺度・形式性追求傾向尺度併せての分析では、マニュアル志向が薬を飲む選択肢を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示していたと考えられる。これは、マニュアルがないと不安になるという特徴を持つマニュアル志向の人が、嫌いな人への対処を悩んでいるときに薬が改善する手引きとする可能性があると考えられる。

薬問題3について、意思決定尺度のみの分析では、不確実性回避が薬を飲む選択肢を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示していたと考えられる。これは、相手に左右され精神的に不安定になることを避けたいと考えた結果によるものだと考えられる。また、形式性追求傾向尺度のみの分析では、マニュアル志向が薬を飲む選択肢を選択する要因として有意な結果を示していた。つまり、「本末転倒」現象の抑制要因として有意な結果を示していたと考えられる。これは、マニュアルがないと不安になるという特徴を持つマニユ

ル志向の人が、好きな人への対処を悩んでいるときに薬が改善する手引きとする可能性があると考えられる。

E. 結論

本年度の研究は、計画通りに実施することができた。

本研究では、一方は食品安全に関してリスクがあるが致命的なリスクは無い選択肢と、もう一方は致命的なリスクがある選択肢の二つのうちどちらかを選択しなければならぬ状況におかれた場合、人々がどのような意思決定をするのかを明らかにすることを検討した。本研究の結果から、実験参加者は、致命的なリスクを負わない食品よりも致命的なリスクを負う食を選択した者は、マニュアル志向などの形式性を追及している場合があった。また、他方で、それとは関係のない結果も得られている。本研究の結果は、食品安全リスクに関する情報の提示の仕方によって、マニュアルなどが安全な選択が促進可能なことを示唆しているが、このことが、意思決定のスタイルと相互作用効果を持つことが明らかになった。

この結果を平たく説明すると（研究のインプリケーション）

本研究の結果から、致命的なリスクを負わない食品よりも致命的なリスクを負う食品を選択した者との間に、マニュアル志向性などの意思決定スタイルが関与していることが示唆された。このことは、ある場合においては、マニュアル志向的な人は食品の安全性を追及していると考えられることである。また、種々の安全に関するマニュアルが食品安全にとって有効なことも示唆している。また、意思決定スタイルを考慮して、マニュアルなどにおける食品安全リスクに関する情報の提示の仕方を変えることによって、安全な選択が促進可能なことが示唆される

のである。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

各分担報告書に記載

2. 学会発表

玉利祐樹・篠塚万理子・井出野尚・大久保重孝・竹村和久・阿部周造（2013）.
食品・住宅選択における消費者のリスク判断の検討—解釈レベル尺度を用いて—
第46回消費者行動研究コンファレンス
報告要旨集，143-146.

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

食中毒リスク認知に及ぼす
提示情報内容と知識の個人差の影響

研究分担者 楠見 孝 京都大学大学院教育学研究科

研究要旨

本研究は、対象者別リスクコミュニケーション手法を開発するために、市民のリスク認知の変化に及ぼす広報資料の提示内容と、個人差要因の影響について検討した。全国の20-85歳の1311（男663，女648）人に対して、情報提示の事前-事後で肉生食または食中毒全般のリスク認知・リスク知識を測定した。そして、保健所の6種の生肉または食中毒全体に関するリスクを伝えるパンフレットのいずれかを提示し、わかりやすさなどの評価を求めた。結果は(a)パンフレットのわかりやすさは、子どもにも分かるもの、手順を明示したイラスト入りのもの、予防法の理由を明示したものが高く、その判断は、事前知識の影響を受けた。(b)リスク認知とリスク知識は、いずれのパンフレットでも情報提供後に上昇した。(c)食品の安全に関する情報は、テレビ、医師、行政から得たいというニーズがあった。また、対象者によって相違があり、高齢者は、テレビ、新聞、家族、女性は、行政や口コミ、子どものいる母親は、学校や幼稚園の先生からの情報を求めている。最後に、これらの結果に基づいて、対象者別リスクコミュニケーション手法の開発のための示唆について検討した。

A. 研究目的

本研究は、対象者別リスクコミュニケーション手法を開発するために、市民の生肉および食中毒全般のリスク認知の変化に及ぼす提示情報内容と、個人差要因（対象者の年齢、性別、子どもの有無、知識、批判的思考態度、メディアリテラシーなど）について検討する。

本研究が取り上げる生肉のリスク認知は、2012年7月から実施された牛肝臓の生食販売提供禁止に対する消費者の反応に顕著にあらわれている。この時期の報道には、レバ刺しやユッケが食べられなくなるということに焦点を当てたものが多かった。これらは一般市民における生肉のリスク認知の低さを反映している。ここでは、2011年4月の富山のユッケ食

中毒5人死亡事件などで代表されるようなリスクは必ずしも市民に共有されていないのが実状である。そこで、保健所などでは、周知・広報資料（ポスター、パンフレット、ウェブページなど）を用いて、牛肉の生食のリスクとその対処方法を広報してきた。それらは、市民向け、子ども向け、事業者向けなどの対象の差異、内容の細かさ、イラスト利用の有無などのバリエーションがあり、市町村レベルの保健所などで様々なものが作られていた。しかし、それらがどのような効果があり、さらに、表現方法や対象者による差異があったかは明らかにされていない。

そこで、本研究では、前年度におこなった大学生対象の調査結果を踏まえて、

実際に保健所などで使用されている広報資料を材料にして、それらが、市民にどのように、理解・評価され、知識や態度をどのように変えたかを明らかにする。

また、その際に受け手の個人差としては、対象者の年齢、性別、知識、子どもの有無、批判的思考態度などを検討する。

B. 研究方法

1. 調査回答者

実験は、インターネット調査を用いて実施した。回答者は調査会社のモニターである20-85歳の1311（男663，女648）名、平均年齢45.3歳、既婚者58.4%，未成年の子供をもつ人24.5%，有職者54.0%，大卒以上46.0%，毎日食事を作る人35.9%，自分または家族が病気の人31.7%であった。

（倫理面への配慮）

インターネット調査会社に登録したモニターに対して、調査目的を明示し、回答承諾者に対して調査を実施した。回答者の個人情報に関する秘密は厳守された。

2. 実験材料

実験材料は、肉の生食禁止と食中毒予防の2通り、各3つのパンフレットを用いた（付録参照）。パンフレットは、保健所等が生肉のリスクに関して、ウェブページに掲載していた広報用のパンフレット・ポスターから、情報提示形式が異なるものを選択した。各参加者には、6種類のメッセージの内の1つを割り当てた。

(a)肉の生食禁止パンフレット：パンフレットは、大人向き詳細情報（イラスト無し）、子どもにもわかる一般向き要点情報（イラスト入り）、子ども向き詳細情報（イラスト入り）の3種類を用いた。いずれも生食禁止のメッセージとその理由、食中毒予防についての情報が含まれていた。

(b)食中毒予防パンフレット：パンフレットは、大人向きの詳細情報（食中毒菌の解説）、大人向きの詳細情報（予防行動の根拠の解説）、子どもの含む一般向きの要点情報（予防行動の手順をイラストで表現）の3種類を用いた。いずれも食中毒の予防法についての情報が含まれていた。

3. 測定項目

(1)事前事後に測定した項目は以下の2問である。

①リスク認知とリスク予防行動

(a)生食用食肉に関する事前事後測定項目は、生食についてのリスク認知、行政からの情報の重視傾向、嗜好性に関する9項目（事後は8項目）に分かれる。

生食についてのリスク認知に関する4項目からなる尺度は「生食用食肉（ユッケなど）は、お店が適切な加工や調理を行えば、安全だと思う（反転項目）」、「お店や生産者は、利益を優先して危険性のある生食用食肉（ユッケなど）を提供しているのではないかと心配である」「生食用食肉（ユッケなど）を食べることによって病気になる危険があると思う」「生食用食肉（ユッケなど）を食べることはやめようと思う」である（ $\alpha = 69$ ）。安全情報の重視傾向の質問項目としては、「行政（国や都県）による肉の安全性・危険性の情報を重視する」、嗜好性については、「生食用食肉（ユッケなど）を食べるのが好きである」、行動については過去の「生食用食肉（ユッケなど）を何度も食べたことがある」であった。ニュースに対する見方については、「牛レバーの生食禁止についてのニュースは、生食ができなくなる」であった。

(b)食中毒全体については、リスク予防行動に関する尺度として、生食と一部共通項目を用いた。内容は大きく3つにわかれ行動では「肉、スープ、シチューは70度以上に加熱する」、リスク認知「生食用

食肉（ユッケなど）は、お店が適切な加工や調理を行えば、安全だと思う（反転項目）」、行政情報の重視傾向「行政（国や都県）による肉の安全性・危険性の情報を重視する」などを含む9項目であった。全体の項目平均評定値を尺度得点とした（ $\alpha = .75$ ）。

②肉の生食または食中毒リスク全般の知識に関する項目は、肉の生食に食中毒の基本的事項に関する7または8項目であり、どのくらい理解しているかという問いに対して、5段階で回答を求めた（例：生肉による食中毒は、腹痛、下痢を引き起こし、重い病気になったり、死亡することがある）（事前生食，食中毒： $\alpha_s = .85, .89$ ）。

(2)情報提供後に、評価を求めた項目は以下の通りである。

③提示情報のわかりやすさなどについては、生食禁止と食中毒防止の情報提供の評価は一部共通項目を用いた（括弧内は食中毒防止）。すなわち「わかりやすかった」「生食を禁止する（食中毒を防ぐ方法の）根拠が述べられていた」「危険を避ける（食中毒を防ぐ）具体的方法が述べられていた」「生肉を食べてはいけないことを納得した」「知りたいと思った情報が書かれていた」の5項目の評価を求めて尺度を構成した（生食禁止，食中毒防止： $\alpha_s = .91, .81$ ）

④メディアリテラシー：メディアの批判的理解（例：新聞や報道番組の内容をいつも批判的に見ている）や能動的情報行動（例：テレビや新聞などの情報をそのまま信じるのではなく、他のテレビ局の番組や新聞、インターネットで確かめている）、マスメディアのバイアス認知（例：テレビや新聞をみていて伝え方が公平でないと思うことが多い）、マスメディアの技法理解（記者の集めた情報の中で、報道されていない情報が何かを考える）に関する5項目から構成された尺度である（ $\alpha = .78$ ）（楠見・松田，2005）。

⑤批判的思考態度尺度：批判的思考態度尺度（平山・楠見，2004）を改訂したものである。これは、「論理的思考の自覚」、「探求心」、「客観性」、「証拠の重視」の4因子各3項目の、合計12項目によって構成される尺度であった（ $\alpha = .90$ ）。

①から⑤の各項目については、「1:あてはまらない」から「5:あてはまる」までの5段階で評定を求めた

⑥情報源の信頼性評価は、食中毒の情報を探す時の9の情報源（新聞，テレビニュース，政府・行政の広報など）に対する信頼性評価を5段階（1:信頼できない-5:信頼できる）で求めた。情報源は大きく3つに分け、行政情報の信頼度（行政広報，HP，2項目， $\alpha = .88$ ）と、インターネット情報信頼度（市民，消費者団体HP，2項目， $\alpha = .52$ ），マスメディア情報信頼度（TVニュース，情報番組，新聞，週刊誌，4項目， $\alpha = .76$ ），口コミ情報信頼度（家族，友人，先生，3項目 $\alpha = .69$ ）に分けた。

⑦メディア接触時間として、平日1日平均の紙の新聞，ニュース番組，インターネットへの接触時間について分単位で回答を求めた。

C. 研究結果

1. 提示情報のわかりやすさ

肉の生食禁止および食中毒予防それぞれのパンフレットについて5つの評価項目ごとに1要因の分散分析で3種の提示情報の差異を検討した。

(a)肉の生食禁止 表 1a に示すように「わかりやすかった」については、提示情報の有意な主効果があり（ $F(2,656) = 10.97, p < .001$ ），子ども向き情報と一般向きイラスト入りは、大人向き詳細情報よりもわかりやすいと評価された（以下 $p < .05$ ）。子ども向き情報は詳細イラスト無しよりも「危険回避方法が記述されていた」「生肉禁止を納得した」については有意に評価が高かった（ $F_s(2,656) = 5.31, 5.06, p < .01$ ）。

(b)食中毒予防 表 1b に示すように「わかりやすかった」も「危険回避方法が記述されていた」については、提示情報の有意な主効果があり $F_s(2,656) = 4.66, 4.94, p < .01$), 予防行動イラスト情報は、詳細食中毒菌情報よりもわかりやすく、危険回避情報が記述されていたと評価された。予防根拠情報パンフレットは他の情報よりも「危険回避方法が記述されていた」と有意に高く評価されていた $F(2, 656) = 6.88, p < .001$) .

2. 対象者による提示情報評価の差異

提示情報の 5 つの評価の平均点について、対象者による差異があるかどうかを、65 歳以上と未満 ($ns=137,1173$), 男女 ($ns=663,648$), 未成年の子どもを持つ母親かどうか ($ns = 321,990$) という人口学的区分と、批判的思考態度、リスク知識量に基づいて検討した。

(a)肉の生食禁止 表 2a に示すように、詳細な説明をしたパンフレットは、65 歳以上の高齢者は未満の者よりも、女性は男性よりも有意に高く評価していた ($ts(243)=6.71, 4.49, ps < .001$). 他に、女性が男性よりも高く評価していたのは、子ども向きの詳細なパンフレットであった ($t(212)=2.66, ps < .01$). 相関を見ると事前の生食に関する知識は、どのパンフレットの評価とも弱い相関があった (.332-.341). 批判的思考態度とは、子ども向きパンフレットだけが相関があった (.307).

(b)食中毒予防 表 2b に示すように、65 歳以上の高齢者は、未満の者よりも、予防行動の根拠やイラストで手順を示したパンフレットを有意に高く評価していた ($ts(224)=2.03, 1.86, ps < .05, 10$). 女性が男性よりも高い評価をしていたのは、イラストで予防行動の手順を説明しているパンフレットであった。予防行動手順をイラストで説明したパンフレットは、高齢者と女性にわかりやすいパンフレットで

あった。また、相関係数をみると、食中毒菌に関する詳細パンフレットに対する評価が高いのは、事前の食中毒の知識が高い者、批判的思考態度の高い者、行政への信頼感が高い者であった。また、予防行動の理由を述べたパンフレットの評価が高かったのは、食中毒予防行動をこれまで実践してきた者であった。

3. 食品安全性の情報源ニーズと相関

食品安全性に関する情報を、どこから入手したいかを尋ねたところ、表 3 の 2 列に示すように、マスメディアでは、テレビのニュースが最も高く、新聞がそれにつづき、週刊誌は最も低かった。人の情報源では、医師・看護師が高く、家族が続いていた。行政のホームページとパンフレットも高かった。

表 3 の 3 列以降に示した批判的思考態度との相関を見ると、批判的思考態度の高い人は、行政、医師看護師、専門家講演会、行政から情報を得たいと回答していた。また、メディアリテラシーの高い人は、テレビの情報番組からは、情報を得たくないとする傾向があった。事前の食中毒の知識が高い人は、行政や新聞から情報を得ようとする傾向が高い。また、行政への信頼の高い人は、行政そしてテレビから情報を得ようとし、インターネットへの信頼が高い人は、消費者団体の HP やインターネットサイトから情報を得ようとする傾向があった。

表 4 は、食品の安全性情報をどこから入手したいかに関する評定について、対象者間で、有意な差異がある項目を示している。

65 歳以上の人が 64 歳以下よりも情報入手を希望しているリソースは、テレビのニュース、新聞、情報番組、電話相談である。女性が男性よりも希望しているソースには、テレビのニュース・情報番組、友人・知人がある。未成年の子どもをもつ母親は、学校幼稚園のミニ集会、

インターネットが高く，テレビのニュースや新聞が低いのが，特徴的である．

4. 生食と食中毒のリスク認知と知識の事前事後の変化

情報提示の事前事後の項目評定値の変化を，生食と食中毒，それぞれ3つの提示群ごとに対応のある平均値の差の検定をおこなった．

(a)肉の生食禁止 図1aに示すようリスク認知に関わる項目「生食用食肉（ユッケなど）を食べることによって病気になる危険があると思う」「生食用食肉（ユッケなど）を食べることはやめようと思う」は評定値が情報提示前より提示後に3つの提示条件とも有意に高くなった

（大人向き詳細， $t_s=7.23, 2.55, p_s<.001$ ；一般向き要点， $t_s=6.77, 2.58, p_s<.001, .05$ ；子ども向き， $t_s=6.08, 2.40, p_s<.001, .05$ ）．また，図1bに示すように生食のリスク認知尺度，リスク知識の得点についても，3つの提示条件とも有意に高くなった（大人向き詳細 $t_s=6.75, 13.84, p_s<.001$ ；一般向き要点 $t_s=6.10, 12.17, p_s<.001$ ；子ども向き $t_s=5.45, 11.32, p_s<.001$ ）

(b)食中毒予防 図2aの食中毒に関する知識得点と図2bの予防行動に関する得点の平均値は，いずれの群においても，情報提示前より提示後に3つの提示条件とも有意に高くなった（大人向き食中毒菌詳細それぞれ $t_s=10.57, 7.26, p_s<.001$ ，一般向き予防行動イラスト $t_s=9.76, 6.55, p_s<.001$ ，大人向き予防行動理由 $t_s=8.64, 6.14, p_s<.001$ ）

D. 考察

本研究では，肉の生食禁止と食中毒全般についてのリスクコミュニケーションの手法として，パンフレット，ポスターなどの広報資料を取り上げた．そして，保健所などの6種の広報資料（大人向き，子ども向きにもわかる一般向き，子ども向き，イラストの有無など）を比較した．

調査対象者として，20-85歳の市民を取り上げ，その中で高齢者，女性，子どものいる母親などの対象者別の検討をおこなった．

その結果，明らかになったことは以下の通りである．

(1)パンフレットのわかりやすさは，子どもにも分かるもの，手順を明示したイラスト入りのもの，予防法の理由を明示したものが高く，その判断は，事前知識の影響を受けた．

(2)リスク認知とリスク知識は，いずれのパンフレットでも情報提供後に上昇した．

(3)食品の安全に関する情報は，テレビ，医師，行政から得たいというニーズがある．信頼する情報源から得たいという一般的傾向がある．また，対象者によって相違があり，高齢者は，テレビ，新聞，家族，女性は，行政や口コミ，子どものいる母親は，学校や幼稚園の先生からの情報を求めている．

以上の結果は，子どもにもわかるように，(a)生肉をどうして食べていけないのか，(b)食中毒になるとどうなるのか，(c)どうすれば食中毒を防ぐことができるのか，(d)ほかに気をつけることがあるのかを具体的にわかりやすいことばで記すことが，高齢者をはじめとする多くの市民にとってもリスクに関する情報が伝わり，適切な対処行動の理解につながることを示唆している．

E. 結論

最後に，本研究および従来の研究の結果に基づいて，対象者別のリスクコミュニケーションの方策を，人口学的グループでまとめたものが表5，心理学的グループにまとめたものが，表6である．

表5に示すように，リスクコミュニケーションを(a)高齢者に対しておこなうときは，テレビや対面を通して実践できる方法をわかりやすく伝えることが大

切な事、(b)こどもの親に対して行うときは、学校・園における先生を媒介にして、子どものリスクを下げるとことに焦点をあてたコミュニケーションが大切である。

また、表6に示すように、リスクリテラシーの低い人には、まずリスク存在とその対処方法を知らせること、信頼性の低い人には、知識や批判的思考態度を高めるとともに情報源の信頼性を高めることが考えられる。

以上の通り本年度の研究は、計画通りに実施することができた。本年度の成果に基づいて、子どもから大人までの多様な市民を対象とした情報提供手法と評価技法について講習会を実施や、成果の公表をはかっている。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

楠見 孝・平山るみ (2013). 食品リスク認知を支えるリスクリテラシーの構造:批判的思考と科学リテラシーに基づく検討. 日本リスク研究学会誌, 23(3), 1-8

楠見 孝 (2013). 心理学とサイエンスコミュニケーション 日本サイエンスコミュニケーション協会誌, 2 (1), 66-80.

楠見 孝 (2013). 科学リテラシーとリスクリテラシー 日本リスク研究学会誌 23(1) 29-36.

2. 学会発表

楠見 孝 (2013). 生肉のリスク認知に及ぼす提示情報内容と知識の個人差の影響 産業組織心理学会第29回大会, 京都橘大学, 9月8日

楠見 孝・平山 るみ・嘉志摩佳久 (2013). 放射能リスクに関する対立情報の統合:片面-両面提示情報源の信頼度 日本心理学会第77回大会, 北海道医療大学, 9月19日-21日.

三浦麻子・楠見 孝・小倉加奈代 (2013).

情報メディアに対する信頼と高次リテラシー:震災後のパネル調査データによる検討(3), 日本社会心理学会第54回大会, 沖縄国際大学, 11月2-3日

3. 書籍

上市秀雄・楠見 孝 (2013). リスク認知 矢守克也, 前川あさ美(編) 発達科学ハンドブック 7 災害・危機と人間, 第16章 新曜社

楠見 孝. (共編著) (2013). ヒューリスティック 日本認知心理学会編 認知心理学ハンドブック (有斐閣ブックス) 有斐閣

楠見 孝. (2013). 意思決定. 日本発達心理学会・編, 発達心理学事典, (pp. 82-83), 丸善出版.

鈴木真理子・楠見 孝・都築章子・鳩野逸生・松下佳代 (編著) (印刷中). 科学リテラシーを育むサイエンス・コミュニケーション:学校と社会をつなぐ教育のデザイン 北大路書房

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他


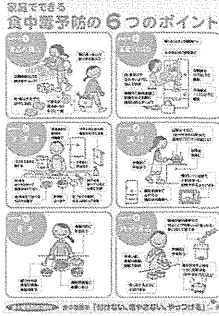
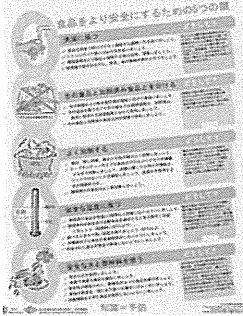
なし

表 1a 肉の生食3種のパンフレットの特徴と評価

対象	大人向き	一般向き	子ども向き	
内容	詳細 理由, 危険性	要点・イラスト 予防行動	詳細・イラスト 理由, 予防行動	
提示 情報				F比
わかりやす かった	4.06 ^a	4.36 ^b	4.40 ^b	10.97 ^{***}
危険回避方 法が記述さ れていた	4.16 ^a	4.28 ^{a,b}	4.41 ^b	5.31 ^{**}
生肉を 禁止を 納得した	4.14 ^a	4.17 ^a	4.30 ^b	5.06 ^{**}
根拠が 述べられて いた	4.14	4.12	4.29	2.34 ⁺
知りたい 情報が書か れていた	3.84 ^a	4.03 ^b	4.09 ^b	4.95 ^{**}
平均	4.07 ^a	4.19 ^{a,b}	4.32 ^b	6.45 ^{**}

Note:*, $p<.05$, **, $p<.01$, ***, $p<.001$, +, $p<.10$, $df=2/656$

表 1b 食中毒 3 種のパンフレットの特徴と評価

対象	大人向き	一般向き	大人向き	F比
内容	詳細 食中毒菌	要点・イラスト 予防行動, 手順	詳細 予防行動, 理由	
提示 情報				
わかりやす かった	3.97 ^a	4.07 ^{ab}	< 4.21 ^b	4.66**
危険回避方 法が 記述 されていた	4.10 ^a	4.23 ^{ab}	< 4.29 ^b	4.94**
生肉を 禁止を 納得した	3.95 ^b	3.88 ^b	> 3.59 ^a	3.50*
根拠が述べ られていた	3.87 ^a	< 4.17 ^b	3.79 ^a	6.88***
知りたい 情報が書か れていた	3.76	3.93	3.81	2.35 ⁺
平均	3.93	4.06	3.94	2.31 ⁺



Note: *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$, +: $p < .10$, , $df = 2/653$

表 2a 肉の生食 3 種のパンフレット評価の対象者間の差異

対象	大人向き	一般向き	子ども向き
内容	詳細理由, 危険性	要点・イラスト 予防行動	詳細・イラスト 理由, 予防行動
提示情報			
パンフレットの評価の対象者間の差異(5段階評価)			
65歳以上が高い評価	65歳以上 vs. 以下 4.69 > 4.01***	65歳以上 vs. 以下 4.30 = 4.18	65歳以上 vs. 以下 4.50 = 4.29
女性が男性より高い評価	女性 vs. 男性 4.33 > 3.86***	女性 vs. 男性 4.20 = 4.17	女性 vs. 男性 4.42 > 4.21**
女性で未成年の子どもの有無	子ども有 vs. 無 4.06 = 4.07	子ども有 vs. 無 4.10 = 4.22	子ども有 vs. 無 4.27 = 4.32
パンフレットの評価と対象者の個人差変数との相関			
批判的思考態度	.068	.107	.307**
事前生食知識	.328**	.332**	.341**
行政情報信頼	.416**	.349**	.350**
マスコミ情報信頼	.388**	.293**	.329**

Note: *: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

表 2b 食中毒 3 種のパンフレットの特徴と評価

対象	大人向き	一般向き	大人向き
内容	詳細 食中毒菌	要点・イラスト 予防行動, 手順	詳細 予防行動, 理由
提示 情報			
パンフレットの評価の対象者間の差異(5段階評価)			
65歳以上が高い評価	65歳以上 vs.以下 3.96=3.92	65歳以上 vs.以下 4.15>3.90*	65歳以上 vs.以下 4.33>4.03+
女性が男性より高い評価	女性 vs.男性 4.00=3.85	女性 vs.男性 4.02>3.85*	女性 vs.男性 4.07=4.05
女性で未成年の子ども有無	子ども有 vs. 無 4.03=3.89	子ども有 vs. 無 4.00=3.91	子ども有 vs. 無 3.89<4.12*
パンフレットの評価と対象者の個人差変数との相関			
批判的思考態度	.349**	.247**	.231**
事前食中毒知識	.498**	.243**	.297**
事前食中毒予防行動	.305**	.176**	.364**
行政情報信頼	.340**	.285**	.361**
マスコミ情報信頼	.275**	.304**	.255**

Note:*.p<.05,**:p<.01

表 3 食品安全性の情報源ニーズと相関 (N=1311)

どこから情報を入手したいか (5:情報得たい-得たくない)		批判的 思考態度	メディア リテラシ	事前食中毒 知識	事前生食 リスク認知	信頼 行政	信頼 ネット
テレビのニュース	3.91	.160**	-.135**	.138**	.181**	.347**	.254**
医師, 看護師	3.79	.258**	.139**	.199**	.132**	.182**	.152**
行政ホームページ	3.68	.286**	.073**	.247**	.113**	.491**	.207**
行政パンフ	3.65	.269**	.029	.236**	.077*	.482**	.208**
新聞	3.61	.156**	-.145**	.225**	.166**	.296**	.223**
家族	3.27	.174**	-.007	.058	.105**	.113**	.219**
テレビの情報番組	3.24	.058*	-.247**	.035	.040	.271**	.373**
消費者団体HP	3.17	.270**	.087**	.147**	.146**	.196**	.470**
行政電話相談	3.09	.243**	.033	.225**	.134**	.271**	.225**
専門家講演会	3.08	.272**	.057*	.210**	.074	.181**	.235**
友人・知人	2.98	.135**	-.013	.060	.051	.086**	.277**
インターネットサイト	2.79	.101**	.031	.048	.044	.036	.449**
学校・幼稚園ミニ集会	2.68	.153**	.048	.115**	.008	.105**	.249**
週刊誌	2.35	.059*	-.059*	.118**	.006	.055*	.292**

Note:*.p<.05,**.p<.01

表 4 対象者によるの食品安全性情報源ニーズの差異

どこから情報入手したいか(5:情報得たい:得たくない)		65歳以上	女性	未成年の子ども
テレビのニュース	3.91	<4.11**	<4.07***	>3.41(+)
医師, 看護師	3.79		<3.85*	
行政ホームページ	3.68		<3.73+	
行政パンフ	3.65		<3.70+	
新聞	3.61	<4.11***	<3.72***	>3.51(***)
家族	3.27	<3.42*	<3.35***	
テレビの情報番組	3.24	<3.49**	<3.37***	
消費者団体HP	3.17	<3.33+	<3.23*	
行政電話相談	3.09	<3.38***		
専門家講演会	3.08	<3.27*		
友人・知人	2.98		<3.13***	
インターネットサイト	2.79			<2.94*
学校・幼稚園ミニ集会	2.68			<3.03***
週刊誌	2.35			

Note:*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$, +: $p<.10$

表 5 対象者の人口学的グループ分けとアプローチ

人口学的変数	受け手(対象者)の例	場所の例	担い手	媒体の例	考慮すべき点
年齢別	児童・生徒	学校	教員 専門家	授業, 教材	発達段階を考慮
	高齢者	施設 地域 家庭	施設関係者 家族	対面, パンフレット, 集会	実践できる方法をわかりやすく
ライフサイクル	妊婦, 病人 その家族	病院 サークル	医師 看護師 知人	対面, パンフレット, 集会 ネット	特別な関心, ニーズに焦点を当て, リスク低減方法を伝える
	小さいこどもの親	保育園 幼稚園 サークル	保育士 教員 知人	対面, パンフレット, 集会, ネット マスメディア	
男女	女性	職場 サークル ネット	同じ立場の人 専門家 など	文書, ネット, 集会	知識, 経験レベルに合わせる
学歴, 職業	職業人				